雑駁とした「送迎問題」に関しての考察
～送迎は本当につらいのか～

交通まちづくりの広場～人と環境にやさしい交通をめざす協議会～　浪瀬佳子
namise@mbm.ocn.ne.jp

はじめに

「ニュアンスとして送迎の大変さを思っているだけで、発表に値するほどのまとめには至っていない」という想いの私は、「実際に生活する中で気づいた、まだそれほど目立っていない不具合を躊躇いがちに言ってみることがこの研究発表大会の真骨頂。最初の気付きの発表としてどうでしょう。」という言葉に背中を押され、生活者としての考察をしてみました。あまりにまとまりの無い考察となりますが、躊躇っても社会の不具合を発表する人がこれからも出てくることを期待しつつ、皆みなさまの陰に隠れこっそりと報告いたします。

１．送迎の色々

富山では、昨今、富山地鉄の存廃問題がマスコミや一般市民も含めて、今までになく取り沙汰されています。報道でも存廃による影響が頻繁に取り上げられ、様々な角度から番組が形成されました。　ある日の民放ニュースでは、高校生の通学へ与える影響が取り上げられ、とある高校生が「電車がなくなると学校に通えなくなる。」と不安げに答えていました。鉄道の有無で、子どもたちの進学先が変更せざるを得ないことを、今まで富山ではあからさまに人の口に登ることはあまり無かったようですが、今回改めて、交通と進路の関係が人々の意識に上がったようです。

写真-1　富山地方鉄道

富山へ戻って、9 年が過ぎようとしています。

車社会と言われる富山で、確かに子どもの送り迎えにお母さんが活躍（?）している姿をよく見る気がします。小学校の統廃合が進みつつある富山では、統合された小学校の下校時にお迎えの車がずらりと並ぶ様子もよく目にする光景で、富山の母親にとって、小学校の子どもの送り迎えも当たり前の生活の一部になっているようです。

朝夕の高校生の駅への送迎もよく目にする光景で、移り住んでしばらくは見慣れない光景に戸惑ったりしたものでした。

また、昨年黒部で行われた土井勉先生の講演会でも、送迎が女性の人生の時間を大きく使っていることや、また、そのために 30 代 40 代はパートやフルタイムで仕事しづらい、また、そんな親を見ていることが若い女性の地方離れに影響が出ている、という話も出ていました。

写真-2　富山地方鉄道　富山駅

２．こんな送迎　あんな送迎

では、日常的に派生する送迎にはどんなものがあるでしょう。思いつくだけでも、

・子どもの学校・幼稚園などへの送り迎え

・子どもの習い事への送り迎え

・配偶者の最寄り駅までの送り迎え

・家族の送り迎え（病院・買い物など）

近頃では、デートするにも母親が送り迎えすることもあるとかで、「流石にデートはどうなんだろう？」と思わないでは無いですが、事実この世に存在するそうです。

送迎は、送られる側の都合に送る側が合わせることが多いため、送る側の時間を細切れに提供する必要があります。確かに、細切れな時間の提供は、送る側の人生を不安定なものにしますし、現代の日本社会の労働形態のありようでは、安定した職業に就くのが難しい状況となります。また様々な社会的な活動への参加の機会も失うことになりそうです。その結果、社会でのキャリアの積み重ねに影響が出て、送る側の人生に不利に働くことが確かに多いかも知れません。

３．送迎は本当に負担になっているのか

我が家のお向かいの奥さんは、今回のテーマにあるような、送迎する側に置かれている女性です。

お子さんの送り迎え、習い事、時に実家のお母さまの送り迎え、時に、ご主人の仕事の関係での送り迎え。犬の散歩に、犬の病院への送り迎え etc.etc.

では、彼女の人生は負の影響を受けているか？

「否」です。

彼女は、今の生活を十分謳歌し、地域活動や自分の趣味、お友達とのお出かけもあれば、時にお向かいの奥さんである私との楽しい立ち話の時間もしっかり持っています。

もちろん、その家庭その家庭、家族構成、立地条件、もしくは土地柄、家にある車の台数、そして本人の性格などで一概に言うことができないとは思うのですが、送迎が本当に負担になっているかは、人と立場によって違いがあるようで、全ての送迎する側の人間が負担を感じ不幸に思っている、と言うことでもなさそうです。とは言うものの、公共交通の恩恵を受けにくい立場にある人が、送迎による負の影響を受けていることも事実です。楽しい送迎、やな送迎、それによって負担感も重くなったり軽くなったりしていそうです。時に人生までも変化させることもあるでしょう。

おわりに

今回発表するにあたって、以前から気になっていた「送迎問題」を台所でにんじん刻みながら、玄関を掃除しながら、折に触れつらつらと考えてみました。考えるにあたって、我が家の近所の皆様の状況を思い浮かべながら、考察したわけですが、送迎している人が本当に不幸せか？というとそうでも無いようことに気がつきました。つい最近お母様が亡くなられた近所のお嬢様は、一人残されたお父様のお世話のために毎日のように実家へ通い、お父様の送迎係を担っておられます。久しぶりのお父様との時間はなんだか楽しそうで、今回取り上げた「送迎問題」も、時に喜びも生み出すのだなあと考えるに至った次第です。

写真-3　雪でも送迎

さて、このような稚拙な私の考察が、社会の不具合に気づいた人が躊躇いつつも、今後社会に向けて発表する機会に繋がるでしょうか。繋がることを願いつつ、稿を閉じます。